

『いつか青空をゆく君たちへ』

○ハルの手紙

ハル：『この手紙をきみに出すかまだ決めていないけれど、書き始めてみようと思う。あれはたしか 2645 年の頃。世界は突如として出現した人体を破壊する菌類 DAX(ダックス)によって、人口の半分以上を死滅させられた。テクノロジーは残ったものの、それらの扱い手を失った人間の生活水準は低下の一途をたどって。おかしいな、報告書っぽくなっちゃった。そんな中でぼくは、空便社(くうびんしゃ)で配達員をしていたんだ。知ってると思うけど』

○エリア 5 6 空便社内

手紙が仕分けされているのか怪しい部屋の散らかり具合
窓際の鳥止まり木の上にいるぽっぺと小声で話をしているハル
郵便の依頼は滅多にこない
なので郵便局員のルイは物資輸送の依頼書からリストを作成している

郵便局員：食料に一水、薬はいいけど、武器って。っは一、ふーん。一般人まで武器を持つなんて、世も末。お？ 正規の依頼状。ハルー、久しぶりの仕事だよー

ハル：ほんとう！？ いま行くよ。ごめんね、ぽっぺ。郵便の依頼だ

ぽっぺ：(えー、もうちょっと) ぽっぽ～

ハル：あはは。駄目だよ。みんな手紙を待ってるんだから。届けないと

郵便局員：は～～、電子文書が届かない区域、また増えたらしいね。どこもかしこも DAX (ダックス) 患者だらけ。いやになる

ハル：みんな治療を頑張ってるし、きっといつか特效薬が出てくるよ

郵便局員：(乾いた笑い) 出てくるもんか。きのこパンデミックからもう 250 年以上だ。そろそろ国民全員がカビやキノコ人間に成長するね

ハル：ならないよ！ ぜったい

ぽっぺ：(同意) ぽぽ！

郵便局員：そうはいつでもなー、生活はどんどんアナログに戻ってるし。電力は一部のやつらしか使えないし、化石燃料にだって限りがある。は～～駄目だ、死ぬしかない

ハル：そんなこと言わないで！ でも、そうだね。ソラワタリに乗れる子も減ってきてる

郵便局員：ソラワタリはさ、操作しにくいんだって！！ なんで誰でも飛ばせるようにしてない？ 安全装置とかないし、空から落ちたら一撃死で――

ハル：あーあーあ～はいはい。依頼だよ。行ってくるよ

郵便局員：……はあ～～。依頼人はエリア56のB地区。ミサキマミ

ハル：うん。行ってきます！

○エリア56 B地区

依頼人の家の扉を叩く

ハル：こんにちは～。空便社のハルです。こんにちはー！ ……おかしいな、留守かな

セイが家に帰ってくる

不審な子供がいるので警戒

セイ：だれだ、おまえ

ハル：うわあ！？ あ、人か。はじめまして、ぼくは空便社のハル。郵便の依頼を受けたんだけど

セイ：おまえみたいなガキが？ っは、ウソくさい。母さんになんの用だ。おれの家には金なんてないぞ！

ハル：ち、違うよ！ ぜんぜん違う。本当に依頼なんだ。きみのお母さんに会わせて

セイ：近づくな、どろぼう！ それ以上くると殴る

ハル：なにも盗んでないのに！？

家の扉があく

セイ母：けほけほ。セイ、帰ったの？ あら、お友達かしら

セイ：母さん、扉を閉めろ！ こいつ泥棒だ！

ハル：違うよ！ ぼくは郵便屋！

セイ母：まあ、まあまあ郵便屋さん？ 嬉しい。依頼を受けてくださるのね。けほけほ。ああ、ごめんなさい、この頃は体調がすぐれなくて

セイ：母さん、ベッドに戻って。おまえは入るな

お邪魔しますを言えば入れるかなと言ってみるハル

ハル：おじゃましまーす？

セイ：不法侵入だ

ハル：うー。入ってもいい？

セイ：駄目

セイ母：さあどうぞ。お茶を淹れますね

ハル：！ ありがとうございます。おじゃましまーす！

○エリア56 セイの家

リビングに移動し、お茶を飲む

セイは不貞腐れているが同席している

ハル：それで依頼というのは

セイ母：エリア33の医療施設にいる夫に手紙を届けてほしいの

ハル：わかりました。返事はどうしますか？ 往復便だと別にお金がかかるんだけど

セイ母：返事は。ごめんなさい、お金を工面できそうにないわ

セイ：タダで受けろよ。帰ってくるだけなんだから

セイ母：駄目よ、セイ。郵便屋さんはエリアの外に出て、危ない目に遭うのだから

セイ：っはん。外じゃDAX菌がそこらに蔓延してて、大量に吸い込むとカビとかキノコ人間になるって話だろ？ (不貞腐れて) 浄化マスクしてれば大丈夫なんだし

ハル：襲ってくる獣とか感染者もいるからね！ エリア外に行くなら車とかバイクで移動しないと駄目だよ

セイ母：(諦めたように) ガソリンを使える人なんて、富裕層だけよ

セイ：じゃあおまえは、どうやってエリア33に行くつもりだよ

ハル：ぼく？ ぼくはソラワタリに乗るんだ

セイ：ソラワタリい？

ハル：(嬉しそうに) 見てみる？ 乗せてみてあげようか？

セイ母：まあ、よかったわね、セイ——っ、けほけほ。けほけほけほ！

セイ：母さん！？

セイ母：けほ、ふう。大丈夫だから。セイは遊んでいらっしやい。私は少し寝ているから。

郵便屋さん、手紙をお願いね

セイ：……行くぞ

ハル：あ、うん。でも

セイ：いいから、こい！

○エリア56 道

他人にソラワタリを紹介するので少し緊張しつつ、嬉しいハル

ハル：セイ、見て！ これがソラワタリ

セイ：うわ、なんだこれ。でっかい紙飛行機？
ハル：ふふ～。カッコいいでしょ
セイ：え、ダサイ
ハル：え！？ うそ、どこが？
セイ：どこがって、全部。……往復だと別料金がかかるんだよな
ハル：え？ あ、手紙のこと？ うん、そうなんだ。ごめんね
セイ：じゃあこれにおれも乗せてエリア33まで行け
ハル：え、はえ？ うえええええ！
セイ：なんだよ。おまえが言ったんだぜ、乗せてみてやろうかって
ハル：そりゃ言ったけど
セイ：親父から手紙を受け取ったら、おれが持って帰って母さんに渡す
ハル：どうやって帰ってくるつもり？
セイ：エリア同士で物資輸送してるだろ。運び屋の仕事もあるし。連中の中に入れてもらう
ハル：子供は雇ってもらえないよ
セイ：親が働けない場合は、ガキでも雇ってもらえるんだよ
ハル：でも危ないよ
セイ：つべこべ言わずに飛ばせ！
ハル：うわああああ、乱暴はやめてよ～

○ハルの手紙

ハル：『こうしてぼくはセイを連れてソラワタリに乗ることになったよね。あれ、本当はダメなんだよ。でもきみを置いていくと一人でエリア外に行きそうだったし。ぼくもちょっとだけ、他の人とソラワタリに乗ってみたい気持ちがあったんだ。ソラワタリから見れる景色は、特別だったから』

○ソラワタリに乗って飛行中（※マスク着用中の為音声加工）

セイ：へー、空飛ぶってこんな感じなのか。空の色も
ハル：でしょう！ ぼくらが見上げる空はいつも灰色だけど、ソラワタリに乗ると青空が見えるんだ
セイ：青い空なんて初めて見た。母さんにも見せてあげたい
ハル：胞子の雲が消えれば、いつか青空が返ってくるよ
セイ：……じゃあ、望み薄だな。（眼下を見て）下は汚ねえ道路か。DAX感染者が暴れた跡ばっか
ハル：昔は綺麗だったよ。ねえセイ。セイのお父さんは、その

セイ：あ？ ああ、医者だよ。患者じゃないからその顔やめろ

ハル：そっか！ よかった。お医者さんなんてすごいね！ カッコいい

セイ：すごいもんか。治らない患者の相手ばっかで、母さんのところに帰ってこない。月一の手紙も、この頃は無視するし

ハル：でもたくさんの人を命を救ってるんだ。いい人だよ

セイ：……おれと母さん以外のやつには、いい人なのかもな

ハル：そんなこと。あ、見えた、エリア33だ。降りるよ。ちょっと揺れるから、しっかり捕まって

○エリア33 道

ハル：ここがエリア33。わー、電気が通ってる。ガラス張りの施設に、あれは人工照明？ 植物もたくさん。綺麗だなあ

セイ：(小声) ……こんなとこにいたんじゃ、帰りたくなくなるのは当然か

ハル：ほらセイ、お父さんに手紙を渡しに行こう。どこにいるか知ってる？

セイ：医者なんだから病院だろ。たぶんあれ

ハル：わー。おっきい。さ、セイ、行こう

○エリア33 総合病院

受付ロボが対応する

受付：エリア33の総合病院へようこそ。面会ですか？

セイ：ドクターに会いたいんだけど。ミサキ マサっている？

受付：アポイントメントはありますか？

ハル：ありません。郵便を届けに来たんです。彼はドクターミサキの息子でセイ

受付：確認いたします。しばらくお待ちください。——お待たせいたしました。該当のドクターは当院に所属していません

セイ：は？ いないはずないだろ。マサだよ。ミサキ マサ！

受付：データベースにドクターミサキの記録はありません

ハル：……ここ以外に病院ってありますか？

受付：エリア33の病院は当施設のみです

セイ：親父が、いない？

ムカイ博士が子供たちに気づいて寄ってくる

博士：なにか問題かな

受付：ムカイ博士。子供たちがミサキ マサというドクターを探しています

博士：ミサキの知り合いか？ ん？ ……もしやきみは、セイくんだろうか

セイ：(警戒) そうだけど、あんた誰だよ

博士：ミサキの知り合いだよ。この子たちは私が預かろう

受付：承知しました。生体情報を登録し、当施設の利用者リストに登録します

博士：おいでセイくん。話をしよう。きみのお父さんのことについて

○エリア33 博士の部屋

博士：どうぞ、好きなのところにかけて。さて、なにから話せばいいか

ハル：ムカイ博士はドクターミサキの知り合いなんですよ？ 彼はここにいた。間違いありませんか？

博士：ああ、ミサキはここにいたよ。1年前までは

セイ：いまはどこにいる

博士：どこにも

セイ：ふざけてんじゃねえぞ、オッサン！

博士：ふざけてないよ。ミサキはもう、どこにもいないんだ。セイくん

セイ：くそ親父は3カ月前まで、母さんと手紙のやり取りをしてた！ いないやつが、どうやって手紙書くってんだ

博士：……できれば黙っていたかったが

ムカイ博士は引き出しからいくつもの封筒を出す

セイ：この便せん。母さんが選んだやつ？ なんておまえが持つてる

博士：1年前から、きみのお母さんと文通していたのは私だ。ミサキは1年前に死んだ

ムカイ博士の脳裏でセイ父の言葉が流れる

回想開始

時間がない中、二人で会話

セイ父：頼む、ムカイ。おれが死んでも妻には知らせないでくれ。彼女は心臓が弱いんだ。彼女まで失ってしまえば、セイが

博士：ああ、わかった。必ずだ、約束するよ。きみのふりを私がしよう。だから苦しむなミサキ

セイ父：ありがとう。ありがとう、友よ。すまないっ！

ガードロボが接近する

ガード：DAX レベル上昇、ムカイ博士、ドクターミサキ、カラ離レテクダサイ。コレヨリ対象ヲ隔離シェルター、ニ移送シマス

ガードロボに捕まるセイ父

博士：やめろ。乱暴にするな、彼はまだ人間だぞ！

セイ父：っぐ。ムカイ、ムカイ！ どうか、頼んだぞ！

回想終了

博士：3カ月前までは私がミサキに代わり手紙を書いていたんだ

ハル：どうしてやめたの

博士：奥方をだまし続けるのが辛くて。いつ帰ってくるのか、顔がみたいと書かれるたびに、どう返事していいのかわからなくなって。彼女は病弱だと聞いていたから、会いに来ることはないだろうと、一方的に手紙をやめた。(苦笑) まさかセイくんが会いに来るなんて

ハル：ドクターミサキの遺体はどこに、死因は？

博士：すまないが教えられない

セイ：隠さなくていいぜ。DAX に感染したんだろ。で、キノコ人間になって隔離されて、その後は言わずもがなってな

博士：……なぜそう思うんだい

セイ：ほかに隠す必要ないからな。遺体にすら会えないのは感染するかもしれないからだろ。いや、燃やされてたら、どこにあるのかわからないか

博士：やはりきみは、ミサキの息子だね

ハル：じゃあ遺品はどうです

博士：あるよ、取ってある。持って来よう。でもどうか、このことをマミさんには伝えないでくれ

ハル：博士、手紙のやり取りがなくなれば、おのずと知れることです

博士：わかっている。わかっているが、少しでも悲しまないでいいのなら

セイ：悲しみを後回しにしたって辛いだけだ

博士：きみはマミさんが心配じゃないのか。ミサキの死にショックを受けて、マミさんの命まで失うなんてことになれば！！

ハル：ムカイ博士、落ち着いて

博士：！ すまない。セイくん。きみを前にこんな……。私たちがしっかりしなくてはいけ

ないのに。遺品を持ってくるよ。この手紙も、どうか受け取ってくれ

ムカイ博士が立ち去る

ハル：セイ、あのさ

セイ：黙れよ

ハル：泣きたいなら

セイ：黙れって

ハル：セイのお父さん、どんな人だった？

セイ：……あいつは、いつも仕事のことばっかで、おれと母さんは一番最後。お人好しで、患者がいると記念日でも帰ってこない。だからおれは、あいつの分の飯まで食うんだ。でも次に帰ってきたら、今度はおれが作った料理、食わせてやるって約束してた

ハル：素敵なお父さんだったんだね

セイ：っは！ あんな奴。大嫌いだ

○エリア33 病院外

ハル：セイ、ほんとうに行くの？

セイ：おまえは次の依頼先に行くんだろ。連れていけよ

ハル：いいけど。お母さんはどうするの

セイ：おれが家出てる時は、近所のやつが様子見てくれる。おれがおまえについていくことは――

ぽっぺ：(うん?) ぽっぽ～

セイ：こいつに伝言を持たせる。これくらいの文章なら脚に結えるだろ。おまえ、ハルのペットなんだろ？

ぽっぺ：(うん? ちょっとちがう) ぼろぼ? ぽぽぽ～

ハル：ぽっぺは空便社の従業員。郵便屋からの指示をぼくに届けてくれる賢い鳥!

セイ：つまりエリア56に戻る予定がある鳥。なあ、駄目か?

ぽっぺ：(いーよー) ぽ～ぽ～ぼろろ～

ハル：うそだ! ぽっぺが懐いた?

ぽっぺ：(きみは、なんか好き～) ぼろ、ぼろ～～

セイ：ははは。くすぐったい。なんだ、お前いい奴だな

ぽっぺ：(でしょ～) ぼろ～ん

ハル：むー。ぼくだって仲良くなるのに時間かかったのに

セイ：動物には好かれるんだよ、おれ。母さんへの伝言、頼んだぜ

ぽっぺ：(まかせて) ぼろろ～～

ぽっぺが飛んでいく

ハル：あーあー。心配すると思うよ。ぼくと一緒に行くと、エリア56から離れるし

セイ：それでいい。いまはまだ親父のこと、どう伝えていいか分かんないから、考えたい。
んだよ、邪魔だっていうなら別に。他の奴に頼むし

ハル：待って、待ってよ。邪魔だなんて言ってないよ。一緒に行こう、ソラワタリに乗って。
きみを連れて行ってあげる

セイ：……おう。その、まあ。ありがとうな、ハル

ハル：！ うん！

○ハルの手紙

ハル：『こうしてぼくとセイのソラワタリでの旅が始まった。覚えてる？ きみと過ごした時間は多くなかったはずなのに、とても記憶に残ってる。大変で、とっても大事な時間だった。きみはいま、どうしてるんだろう。また難しい顔してるのかな。ちゃんと休憩取らないと駄目だからね。寝て、食べて、運動するんだよ。じゃあ、またね』

鳥が羽ばたく音

○タイトルコール

ハル：オリジナルボイスドラマ いつか青空をゆく君たちへ

セイ：第一話『あなたからの手紙』